

法崇述 『仏頂尊勝陀羅尼經教迹義記』 訳注(一)

佐々木大樹

一、はじめに

仏頂尊勝陀羅尼とは、仏の頂上肉髻の徳を讃える聖言であり、七世紀頃より中央〜東アジアに広く伝播し、多様な言語に翻訳され、人々の信仰を集めてきた。中国では、六八〇年代以降、本經の梵本が請来され、仏陀波利、杜行顛、地婆訶羅、義淨によつて相次いで漢訳されたが、とりわけ人氣を博したのは仏陀波利訳（大正蔵九六七番）であつた。經序によれば、仏陀波利 (Buddhapāli) は、文殊菩薩に会うために、遙々インドから中国五臺山を訪ね、そこで一老人（≡文殊の化身）より聖囑を受けて、梵本を中国に請来したと伝承される。仏陀波利訳『仏頂尊勝陀羅尼經』（大正蔵九六七番）は、五臺山の文殊信仰を背景として大いに流行し、特に仏陀波利訳を石に刻んだ「尊勝經幢」が中国全土で数多く建立された。

本論で取り上げる法宗撰『仏頂尊勝陀羅尼經教迹義記』（大正蔵一八〇三番、以下、法宗疏と略）は、仏陀波利訳に対する注釈書であり、『仏頂尊勝陀羅尼經疏』とも別称される。この法宗疏は八世紀後半、あるいは九世紀初頭に撰述されたと推定される注釈書であり（次項参照）、唐代密教において、いかに仏頂尊勝陀羅尼が理解され、受容されたのかを知る上で格好の資料といえよう。本論では、法宗疏を訓読して詳細な語注を付し、精読することによって中国唐代における仏頂尊勝陀羅尼の受容について解明を試みたい。

一、撰者・法宗について

法宗疏叙文を記した智暉（一七一七～一七八四）によれば、撰者である法宗は千福寺の僧で、かつて不空三蔵（七〇五～七七四）の門に遊学し、小乗・大乘、さらに密教を学んだとしている。

この智暉の言を裏つけるように、不空に関わる文書を集めた『表制集』（大正蔵二二二〇番）、また『貞元録』（大正蔵二二五七番）には、しばしば「法宗」の名が見える。³ 例えば、広徳二年（七六四）に不空が大興善寺の大徳四十九員を選んだ際、その一人に法宗を推挙している。⁴ 同様に大暦二年（七六七）、化度寺の文殊師利護国万菩薩堂における三長齋月の念誦僧十四人を選んだ際にも、法宗の名が挙げられている。⁵

また法宗は、不空の翻訳事業にも度々参画しており、永泰元年（七六五）の『仁王護国般若波羅蜜多經』（大

正藏二四六番) の再訳⁶、さらに大暦年間中の『大集大虚空菩薩所問經』(大正藏四〇四番) および『大虚空菩薩念誦法』(大正藏一一四六番) の漢訳において、法宗は「証梵文義」⁷を務めたと記録されている⁸。

断片的ではあるが、これらの記録をまとめると、法宗は八世紀後半(特に七六〇年代)に活躍した中国僧であり、数多の弟子を抱えた不空門下において、一定以上の重責を担った僧といえよう。

法宗疏の注釈態度は、全体的に通仏教に依るところが大きいが、下巻冒頭等、(特に金剛頂系の)密教との関わりが看取される。法宗疏の研究は、中国唐代における仏頂尊勝陀羅尼の受容の問題に留まらず、不空の学風、および不空門下における密教理解の解明に少なからず資するものと考えられる。

三、法宗疏の成立について

法宗疏がいつ、どのようにして編纂撰述されたのか、その来歴については不明な点が多い。法宗疏は不空周辺で成立した注釈書ながら、空海(七七四〜八三五)によつては請来されず、後に宗叡(八〇九〜八八四)によつて日本にもたらされた。宗叡の『新書写請来法門等目録』(大正藏二二七四A)に記載される經典儀軌等は咸通六年(八六五)頃に収集されたものであり、同時期を法宗疏の撰述の最下限と考えることができる。ただし、宗叡の目録中では、「仏頂尊勝陀羅尼經疏一部二卷」と記すのみで、撰者の名がなく注意を要する¹⁰。他方、中国側の史料には、經典目録を含め、法宗疏に関する記録は一切みえず、

不空周辺の事跡を詳述する『貞元録』（八〇〇年編纂）にも記載されない。

法崇の記録は、上述のごとく七六〇年代頃に集中することから、法崇の真撰を認めるならば、同時期から遠くない頃に法崇疏が撰述され、何らかの事情で『貞元録』等に収録されなかったと考えられる。もし、法崇に仮託して成立したならば、撰述時期として、『貞元録』以後の八〇〇～八六五年撰述の可能性も出てくる。

現時点では法崇撰を積極的に否定する理由もないことから、前者すなわち七六〇年代から遠くない時期、法崇による真撰を前提にして論を進めてゆきたい。

法崇が『仏頂尊勝陀羅尼經』を注釈した理由について、本文に明記がなく定かではないが、不空の事跡に起因する可能性が考えられる。すでに多くの先行研究で指摘されるように、不空は晩年に至って五臺山の文殊信仰を宣揚し、その一環として五臺山の寺院修造に力を入れたとされる。その過程で、前述の仏陀波利による取経伝説に象徴されるように、五臺山と所縁の深い「仏頂尊勝陀羅尼」に注目したと考えられる。不空は大暦五年（七七〇）、五臺山参拝の帰途に立ち寄った太宗福寺の浄土院を灌頂道場とし、歴代皇帝および国家のため、十四人の僧に絶えず仏頂尊勝陀羅尼を読誦させるように奏上している。この事跡に前後して、不空は『仏頂尊勝陀羅尼念誦儀軌法』（大正蔵九七二番）を翻訳編纂したと考えられる。¹⁴このような不空の姿勢は以降も継承され、不空入滅の翌年にあたる大暦十一年（七七六）、天下の僧尼に対して、仏頂尊勝陀羅尼を毎日二十一遍読誦するように勅令が下されている。¹⁵

法宗は、仏頂尊勝陀羅尼の読誦に関する勅令等、不空晩年から入滅に至る一連の動向を目の当たりにし、『仏頂尊勝陀羅尼經』の意味内容、および機能を明らかにすべく、撰述したものと現時点では考えておきたい。

四、法宗疏のテキストについて

宗叡によつて法宗疏が日本にもたらされて以降、長らく伝写相承されたものと推測されるが、残念ながら管見の限り、古写本の現存を確認できない。

論者が調べたかぎりでは、法宗疏が一般に流布する最初は、長谷寺第十一世能化・亮汰（一六二二—一六八〇）による法宗疏への注釈と、その開板であったと考えられる。亮汰は延宝二年（一六七四）四月、『科註尊勝陀羅尼經』（以下、亮汰注と略）全三巻を著し、同年九月に前川茂右衛門にて開板された。亮汰注は、大意・異訳・請求を記す『懸談』と、仏陀波利訳への『科註』との二段に分かれるが、全編にわたり、ほぼ法宗疏を取り込む形になっており、法宗疏の抄本とも言うべき内容である。本書に引く法宗疏本文には、送り仮名を含む訓点が付されており、訓読に際し大いに参考にした。¹⁶

法宗疏自体の版本が造られたのは、高野山龍光院の高基（生没年不詳）によつてであった。すなわち高基は、安永八年（一七七九）正月、法宗疏の本文二巻、さらに「付録」一巻を加え、京都書院より出

版した（以下、高基本と略）。本文の上部には、注に記したごとく「天地玄黄」から始まる千字文を付し、それに対応する形で「付録」において、法宗疏所引の経論について、高基自身の考察を述べている。その「付録」によれば、高基は高山寺所蔵本を底本として開板したようである。¹⁷

江戸中期の真言僧・智暉が記した法宗疏冒頭の叙文によれば、高基は法宗疏本文の誤りを正し、完全な形で広く世に流布することを願い、開板を志したようである。また「付録」によれば、高基は、いわゆる科注・冠注の類（亮汰注を指すか）では、法宗疏の全体像が分からないとし、仏陀波利等の事跡の顕彰のため、開板を志したと述懐している。¹⁸ 版本の下巻末には「刻料高野山施貨」として高基の志に賛同し、開板に出資、協力した僧俗の名が連ねられている。

法宗疏の版本については、幸いにして論者が所属する真言宗智山派総本山智積院・智山書庫に二本所蔵されていることが判明した。本書の閲覧をご許可いただいた総本山智積院関係各位、また閲覧に際し、諸々ご高配いただいた川崎大師平間寺関係各位に紙面を借りて心より御礼申し上げたい。『智山書庫所蔵目録』第二卷二八一頁に記載される法宗疏版本の書誌情報を転載すると次のようである。

『仏頂尊勝陀羅尼経疏』 三卷三冊

(刊) 金剛峰寺龍光院蔵版高基知之 安永八己亥正月吉辰 京都書林

村上勘兵衛 中野宗左衛門 井上忠兵衛 八尾清兵衛 前川市兵衛

額田正三郎 亦井長兵衛

版本一・二七五×一九三 八一四一 版本二・二七〇×一八八 二二一六

次いで明治三十八年(一九〇五)から大正元年(一九一三)にかけて、蔵外を含む中国撰述典籍を収める目的で、『大日本続蔵経』が編纂され、その第三七巻に法崇疏が収録された(以下、卍続蔵本と略)。卍続蔵本は、訓点の振り方が高基本と一致することから、高基本を底本にしたものと考えられる。ただし、送り仮名が省かれたことから、高基本に比べると読みやすいテキストとはいえない。

次いで大正十三年(一九二四)から約十年の歳月をかけて編纂された『大正新脩大蔵経』では、経疏部・第三九巻に法崇疏が収録された(以下、大正蔵本と略)。大正蔵本は、冒頭の注で明記されるように、卍続蔵本を原本として転載したものである。しかし、送り仮名を含む訓点の一切を省き、ほぼ校異もなく、さらに転載時に起因すると思われる誤植が散見される。法崇疏を参照する場合、通常、大正蔵本を用いると思われるが、江戸期の版本や卍続蔵本と見比べると、良質なテキストとは言いがたい。このような事情から本論では、大正蔵本は参照にとどめ、主に高基本を底本とし、亮汰注および卍続蔵本を参照して訓読を行った。

五、法崇疏の構成について

高基本(版本)、および卍続蔵本・大正蔵本の法崇疏には、仏陀波利訳『仏頂尊勝陀羅尼經』への注釈

(A)～(C)に先立ち、①智暉による叙文と②表制三首が付加されている。③智暉による叙文は、高基本の開板に際し、日本で加えられたものであるのに対し、④表制三首については撰述当初のものか、それとも伝承の過程で付加されたものか判断がつかない。亮汰注に表制三首を引かない点は気になるが、高基本「付録」を読むかぎり、開板の底本とした高山寺所蔵本には、すでに⑤表制三首があったものと推測される。⑥表制三首のうち、二番目の大暦十一年(七七六)二月二十二日、乗如等による表制は、『表制集』『貞元録』等に未収録のものであり、法宗疏の一部として、中国から日本へ伝えられた可能性が考えられる。不空滅後の門下の動向を探るうえでも、貴重な資料といえよう。

※法宗疏の中心的な部分である①教起因縁分、②聖教所説分、③依教奉行分の詳細な構成については、本論末の表を参照願いたい。

内容区分		亮汰注	高基本	正統蔵本	大正蔵本
①智暉による叙文	……		上巻・冒頭二丁	一八二丁右・上	一〇二頁上
②表制三首	……		上巻・一丁右～二丁左	一八二丁右・下～上	一〇二頁上～下
③因縁と概要	上巻・『懸談』一丁右～二丁左		上巻・二丁左～三丁右	一八二丁左・上	一〇二頁下

『仏頂尊勝陀羅尼經』の注釈				
③ 依教奉行分	② 聖教所説分	① 教起因縁分	④ 十門分別	⑤ 題号の大意
下巻・『科註』 三二丁左 〜三五丁左	上巻・『科註』 一九丁右 〜下巻三二丁左	上巻・『科註』 四丁右 〜一九丁右	上巻・『科註』 一丁右 〜四丁右 (第八・九のみ)	上巻・『懸談』 二丁左 〜三丁右
上巻・五二丁右 〜五四丁右	上巻・四七丁左 〜下巻五二丁右	上巻・一〇丁左 〜四七丁左	上巻・四丁右 〜一〇丁左	上巻・三丁右 〜左
二一四丁右・下 〜下	一九五丁・右・下 〜二一四丁右・下	一八五丁右・上 〜一九五丁・右・下	一八三丁右・上 〜一八五丁右・上	一八二丁左・上 〜一八三丁右・上
一〇四〇頁中 〜下	〇二四頁上 〜一〇四〇頁中	一〇一四頁下 〜一〇二四頁上	一〇一三頁上 〜一〇二四頁下	一〇一二頁下 〜一〇二三頁上

六、法宗疏と『提謂波利經』

法宗疏は、証文として『提謂波利經』を多く引用することから、中国仏教、特に疑偽經典の研究において重要な価値を有するようである。経名にある提謂 (Tapassu) と波利 (Bhallika) とは、成道を果たした釈尊に、最初に妙蜜を供養した長者として知られる。先行研究によれば本経は、北魏太武帝の破仏

より仏教を復興させるべく、二長者の説話にヒントを得て、沙門曇靖が民衆教化のために撰述したものとされる。本経は広く民間に流行したが、様々な妄習を含むことから、諸経典目録で「疑偽経典」として除外されつづけ、いつしか本経は散佚し、完本は現存しないとされる。

塚本善隆氏は、この『提謂波利経』を復元すべく、章疏類から二二条の佚文を抄出して発表した(塚本佚文¹⁹)。その後、牧田諦亮氏は、敦煌本『提謂波利経』四種²⁰を見出し、本文翻刻によって概要を示した。法崇疏では、この『提謂波利経』が十箇所で引用される。²¹

- ①又提謂経曰 不論聽法但入寺即得五種功德 一者端正為見三宝心生歡喜故 二者好声為念仏故 三者生天不余惡業故 四者尊貴為礼一切三宝故 五者得証涅槃為有余福故
- ②提謂経云 一年之中三覆八校每月六奏者為六齋也
- ③提謂経云 由痴虚受信施四事供養故 故受猪身
- ④提謂経云 悪口慳貪故 故受猪身為物慳貪
- ⑤又提謂経云 由奸猾語故受野狂身。
- ⑥提謂経云 由遊戯放逸故受獼猴身
- ⑦提謂経曰 応七覚分也
- ⑧提謂経曰 行道七匠者以応七覚分度七世父母也
- ⑨提謂経云 三匠者応三界滅三世罪除三毒応三業也

⑩提謂経云 行道有其三品謂上中下 上者百匝 中者三十匝 下者十匝以応百年

このうち②は牧田氏の論文に類文が確認されるが、それ以外は、牧田氏の翻刻に同文を見出せない。また近年、山口大輔氏が法宗疏に注目し、『提謂波利経』の新佚文として⑧⑨⑩を取り上げるが、①⑦への言及はないようである。本論の主目的とは異なるが、法宗疏と『提謂波利経』に関する今後の研究動向にも注目してゆきたい。

七、訓読・注釈の凡例

・本論で用いた主要資料の略称は以下の通りである。

法宗疏 … 法宗『仏頂尊勝陀羅尼經教迹義記』

亮汰注 … 亮汰『科註尊勝陀羅尼経』(法宗疏の注釈、一六七四年開版)

高基本 … 高基による法宗疏版本(一七七九年開版)

卍統蔵本 … 『大日本統蔵経(卍統蔵)』第三七卷所収本

大正蔵本 … 『大正新脩大蔵経』経疏部・第三九卷所収本

・法宗疏の訓読は、主に高基本を底本とし、亮汰注および卍統蔵本の訓点を勘案して訓読を行い、大正蔵本は参照にとどめた。諸テキスト間の校異については、訓読を行う上で重要と判断されたもの

を中心に注に記した。

- ・法崇疏の訓読は、「灌頂」「五臺山」や「咒」等の一部例外を除き、基本的に常用漢字を用いた。難読の漢字については、読み手の便を考慮して適宜ルビを付した。
- ・法崇疏の訓読本文中に高基本および亮汰注の卷数・丁数、また卍続藏本・大正藏本の卷数・頁数・段等の情報を（ ）で補った。
- ・法崇疏中の難解な仏教用語、中国古典に由来する用語等は、読み手の便とともに、論者自身の理解を深めるため、注にて詳細な解説を付すように心がけた。
- ・法崇疏に引用される他経論の文章は、原則「」に入れて示した。ただ法崇疏には、経論名を明記しながらも、その経論中に対応本文が見出せないことがしばしばある。対応本文を特定できない箇所については、引用の有無や範囲の断定を避けるため、あえて「」に入れないこととした。
- ・法崇疏に引用される経論の典情報、すなわち『大正藏経』等の卷数・頁数および引用元の経論原文を適宜注に示した。その注に引く経論の原文について、法崇疏との比較に重きを置く場合は漢文白文、一方で内容理解に重きを置く場合は訓読文として表記を使い分けた。また、高基本「付録」には、法崇疏所引の経論に関して、高基による丹念な考察がまとめられており、有用と判断された情報については適宜注に加えた。

法宗撰 『仏頂尊勝陀羅尼經教述義記』 訳注 (『正統藏經』三七卷一八二丁・上段) (『大正藏』三九卷一〇二頁上段)

【a】智暉による叙文…法宗疏の由来と開板の経緯】

『尊勝陀羅尼經疏』を鈔むに被^レぞ

曩^{むかし}者²³、仏陀波利三藏²⁴、遠く流沙を涉り、五臺^{ごたい}の大聖文殊²⁵を礼謁し、誨を垂れ、重ねて西域に還り、斯の經を齎^{もたら}し來たる。然れば則ち東方を救済するの方便、蓋し斯の經に過ぎたる無し。先に五訳²⁶を歷るも、未だ釈家、微趣を玄詮し、焉^{こゝ}を將て克通すること有らず。

千福の法崇尊者²⁷、曾て不空三藏²⁸の門に遊び、大小乗教、暨^{ならび}に秘密藏に該貫^{せき}弗^なる靡^なし。乃ち之の『疏』を作り、厥^その体と為。事の衆典を取り、断じて一理^りを目的^{めく}。禍を滅して殃^{わざわい}を銷^けすの秘、寿を延して齡を益すの妙、骸^{うろ}を誥^おす咒土の功²⁹、体を拂う遺塵の利³⁰、此に入り而も彼に出で、浅を以て而も深と為。真に經の意を得べき者か。

南山基公³¹は、世に『疏』を得る者、甚だ罕^{まれ}なるを憾^{うれ}み、魚魯^{ぎよろ}を訂^きして訛^{かひ}謬^{ゆう}を正す。乃ち梓³²に托し、以て海宇に弘む。近く一の妄庸^{ぼうよう}の人有りて、漫^{みだ}りに『疏』の文を裁ち、諸の鄙辞^{びじ}を雜^{まじ}う。蜀錦^{しよつきん}を截^きちて檻^{らん}縷^らに紹³⁴ぎ、隋珠^{ずいしゆ}を碎^{くだ}きて瓦礫^{がれつ}に参^まずるが如^{ごと}き、然^{しか}なり。今、復た全珠³⁵、完錦^{かんきん}を觀^みるを得。抑も基公の賜なるかな。余、嘗て惡世の人の新^{あらた}を玩^{あそ}び、旧^{ふる}を遺^すつるに、此の盛筭^{せいさん}に遇い、随喜^{ずいき}すること極^{たぎ}まり罔^なし。

乃ち其の事を絞べ、且つ後哲に勧め、復古の学に懋めん。云。

安永己亥正月 沙門 智暉謹撰

【b】『仏頂尊勝陀羅尼』に関する表制三首

(高基本・上 卷二丁右) 代宗 睿文武孝 宝応元聖皇帝、特に、

勅して天下の僧尼をして尊勝真言を誦せしむ。勅を奉じ、京城の修功德使・李元琮に語ぐ。天下の僧尼、仏頂尊勝陀羅尼を誦するに、一月を限り、日誦して精熟せしむ。仍て仰いで毎日誦すること二十一遍、毎年正月一日に至り、賀正使を遣し、所誦の遍数を具して進ませよ。

大曆十一年二月八日 内謁者監 李憲誠、宣す。

沙門乗如等、言く、伏して今月十七日、中書門下の勅牒を奉じ、天下の僧尼をして、并に尊勝陀羅尼を誦せしむるは、天より明詔したまう。扞躍するに任無し。乗如の聞く、大雲、普く覆いて三草、皆な滋る。皇沢、一ら施して万物、咸く潤す。伏して惟れば、陛下の潤、清浄の秘印に叶い、甘露の妙門を(高基本・上 卷一丁左)開く。仏頂の用、如来の慈、人の災を息め、天帝の事を行じ、国を挙げて諷誦す。嚮に風雪に合うに、類に觸れて聞く所、咸く氛霧を除く。豈に刹土を保釐せんや。亦た身心を澄澹にす。凡そ緇林に在り。実に鴻造を荷り、戴くに聖恩、常に殊なるの至を仰ぐに勝えず。謹んで右銀臺門に詣で、

表を奉じ、陳謝以聞す。沙門乘如等、誠に歎び、誠に喜んで謹んで言す。

大曆十一年二月二十二日 京城の釈門衆 大安国寺上座 内外臨壇大徳 乘如等、状進す。

勅して批す。⁴⁸ 仏頂真言の神力、普きを救う。受持・嚴潔にして靈応、無方なり。広(正統藏本 一八二左) 歎誦習して群品を拯済す。師等は梵園の領袖49 慰すること愜当なり。⁵⁰ 深く謝すると知んぬ。

⁵¹ 沙門慧朗等、言す。伏して恩勅を奉じ、天下の僧尼をして、仏頂(高基本・上 卷二右) 尊勝真言を誦持せしむるは、諸仏の心目、蒼生の津梁なり。⁵³ 陛下、仏の付囑を受け、申るに法化を以てす。慧朗の跡、緇門54 に在り。又、叨みだりに近侍して愚誠の分、実に驚き、実に喜ぶ。

伏して惟れば、陛下の謀ること聖慈に協かない、陰かに生利に贊たすく。仁寿の域を致すこと、已に一言に在り。無疆むきようの休を播しきて、以て万国を靖しずむ。山川鬼神、亦た寧やすかならざる莫し。鳥獸魚鼈、允まことに祐を獲んとす。僧に將進の路有り、俗に同善の風を成す。此れ則ち陛下、天下の恩を超え、忝かたじけなくも至道しどうを承けて用と為。豈に愚僧、日用して知る者ならんや。生植うゑの沢、以て云ことに深厚なり。誨誘かいゆうの徳、⁵⁷ 上啓するに何ぞ陛せん。謹んで中使・元応金に附し、表を奉じ、陳謝以聞す。誠に歎び、誠に喜んで謹んで言す。

大曆十一年二月二十三日 京大興善寺 鎮国文(高基本・上 卷二丁左) 殊内閣院供奉 賜紫袈裟 沙門慧朗等、状進す。

勅して批す。仏頂真言の神力は広く被らしむ。庶くは弘益を資たすけて、普く含靈に及ばさん。比ちかる誦持

して勞有るに表謝せしむ。

『仏頂尊勝陀羅尼經教迹義記』卷上

上都千福寺の沙門 法崇 進述

【A】『仏頂尊勝陀羅尼經』の因縁と概要

〔亮法注・上巻・懸談〕二丁右）蓋し聞く、妙途凝邃にして理は有無を出で、至道希夷にして像は視聴に超ゆ⁵⁸。然るに昏衢の積闇、慧炬に資して以て冥を開き、苦海の横流、慈舟を仮て溺を拯う⁵⁹。是に知んぬ、三千の世界俱に有漏の津に霑い、百億の諸天、〔亮法注・上巻・懸談〕二丁左）希に無明の境を出ず⁶⁰。

粵^こに天子有り、其れ善住と名づく。三帰の果満じて、十善の因円なり。神勝殿⁶²の中に怡しみ、宝華園の上に縦^{ほし}にして、朝は妙⁶³（高基本・上巻三丁右）樂を觀すと雖も、千齡の積慶^{せつげい}、未だ窮^{まどか}ならず。夜は空声七日の余殃^{わざわい}、已に近きことを聴き、既⁶⁵に將に危うからんとするの命に迫り、旋^{つひ}で向に受けんとするの軀⁶⁶に驚く。爰に喜見の尊⁶⁷に投じて、式^{もつ}て憂聞の懼^{おそれ}を敍べ、遂に栴提^{かんだい}、念を降し、帝尺主、矜^{あわれ}みを垂るることを得て、宝池に俯して、以て求め乞う。希^{ねが}くは方に金山^{こんせん}を仰いで、之^ゆきて救我を請す。

〔亮法注・上巻・懸談〕二丁右）世尊は大悲、物を拯い、弘道、生を濟う。俄^{にわか}に笑を丹唇^{たんしん}に現す。遽^{にわか}に光を紺頂^{こんちやう}に流す⁷⁰。禍を滅し、殃を銷すの秘法、妙旨、爰に創^{はじ}む。齡を延ばし、寿を益すの奇方、吉祥、斯^こに闡^{ひら}く。故に

橋戸は利を獲て、一時に四弁の音を聞き、善住は恩を蒙りて、六日に三希の歎を発し、宝宮に居して徳を讃じ、既に全軀を質し、金地に樹て、以て恩に酬い、更に摩頂を欣わしむ。

【B】『仏頂尊勝陀羅尼經』という題号の大意

題して『仏頂尊勝陀羅尼』と称するは、蓋し当部の都名、則ち（亮法注・上巻・『懸談』二丁左）此の經の別目なり。其の文と為すらく、辞は約やかなりと雖ども、理、繁し。（高基本・上）（卷三丁左）其の用と為すらく、実に功、深くして、利、大なり。何となれば則ち、骸、咒土に霑え、天宮の（出統藏本）（一八三右）樂果に必ず登り、体、遺塵を拂えば、地獄の苦報を斯に斷ず。故に摩尼淨宝は妙力を華編に擬し、閻浮檀金は神功を葉偈に抵てしむ。

初めに「仏」の号を称して、先ず両足の雄名を標す。次に「頂」の言を説く。方に一身の貴相を敍ぶ。⁸⁰「尊」は、弥、高きを以て称を立て、教体の（大正藏本）（一〇一三）弥、高きを彰す。（亮法注・上巻・『懸談』三丁右）「勝」は至妙を以て名を受け、仏心の至妙を表す。「陀羅尼」とは梵語なり。此に翻じて名づけて総持と曰う。四義の幽宗⁸¹を包み、一經の極指を括る。「經」とは常なり。亦たは転と曰うなり。八十八恒の衆聖、同じく之を演説するを、通じて常と称し、三十三類の諸天、共に之を流通するを、別して転と号す。此の義に因るが故に、遂に『仏頂尊勝陀羅尼經』と曰うなり。

【C】『仏頂尊勝陀羅尼經』の十門分別

(高基本・上 卷四丁右) 將に此の經を積するに、略して十門を以て分別す。

第一に積其教主(其の教主を積す)、第二に以処表事(処を以て事を表す)、第三に顕教被機(教被の機を顯す)、第四には見身同異(身の同異を見る)、第五に出經宗体(經の宗体を出す)、第六に聽法軌儀(聽法の軌儀)、第七に見聞得利(見聞の得利)、第八に積經題目(經の題目を積す)、第九に翻譯時節(翻譯の時節)、第十に依文判釈(文に依り判釈す)なり。

第一の其の教主を積すとは、『大智度論』に依りて云わば、五種有り。第一に仏の説、第二に聖弟子の説、第三に諸天の説、第四に神仙の説、第五に変化の説なり。⁸³今、此の經の中、但だ其の四のみ有りて、神仙の説無し。仏、印可を為したまえば、総名を「經」と為。此れ即ち第一の其の教主を積し竟んぬ。

第二の処を以て事を表すとは、其れに三種有り。第一に国を以て事を表し、第二に林を以て事を表し、第三に園を以て事を表す。且く第一に国を以て事を表すは、即ち是れ室(高基本・上 卷四丁左)羅筏国なり。⁸⁴漢に名づけて聞城と云う。即ち是れ中天竺⁸⁵国の勝軍王の所治の城なり。用て如来は永く三界を超え、長く二乘を出で、悲は四生を潤し、身は万徳を円にする⁸⁶を表す。故に遠く聞城に居す。第二に林を以て事を表すは、即ち是れ誓多林⁸⁷なり。漢に最勝林と云う。此れ即ち、是れ戦勝太子所施⁸⁸の林なり。用て如来の七覺の法林、⁸⁹一切を慈蔭⁹⁰するを表す。第三に園を以て事を表すは、即ち是れ給孤独園⁹¹なり。此れは是れ須達長者

所施の園なり。如來に無量の法有りて、もたら齎すに一切貧乏の衆生に給施するを表す。此れ則ち、是れ第二に如を以て事を表し竟んぬ。

第三に教被の機を顕すとは、然るに教門は是れ一にして、学する所に三有り。故に『智度論』に云く、⁹²兔・馬・象の三獸、河を渡るに浅深異有り。『法華經』に云く、⁹³三子、同じく一門に出づるが如きも、所乘各別なり。仏の言く、(高基本・上 卷四丁左)「我れ若し小乗の法を以て諸衆生を教化せば、我れ即ち慳貪に墮す」⁹⁴と。又、『維摩經』に曰く、「仏、一音を以て法を演説し、衆生、類に隨て各おの解を得」⁹⁵と。上・中・下の智、各おの觀すること別なるが故なり。下智の觀の故に声聞の菩提、中智の觀の故に縁覺の菩提、上智の觀の故に諸仏の菩提なり。此れ則ち第三に教の被機を顕し竟んぬ。

第四に身の同異を見るとは、大梵王は仏の身長を千尺と見るが如し。又、(社統藏本 一八三左) 応持菩薩は仏の身長を丈六と見るが如し。⁹⁷ 即便ちすなわ仏の頂上を量るに、無数の世界に過ぎ、華上の仏刹に至り、還て如來の身は長丈六なりと見る。⁹⁸ 『報恩經』に云うが如し。⁹⁹ 外道は仏を見て、孩子を想うが如し。声聞の人の如きは、但だ丈六身を見る。菩薩は無辺身を見、諸仏は法性身を見る。¹⁰⁰ 所以ゆえに『華嚴經』に曰く、¹⁰¹ 譬えば淨満月の水、水は悉く能く現するが如し。影像は無量と雖も、本質は未だ差別あらず。諸(高基本・上 卷五丁左) 仏の法も是の如く、感に隨いて衆像を現ず。化相は無量と雖も、法体に差別無し。此れ則ち第四に身の同

異を見竟んぬ。

第五に經の宗体を出すとは、外道・小乗は各同じからず。『涅槃經』の如きは、仏性を以て宗と為¹⁰²、『大般若經』は空慧を以て宗と為¹⁰³、『維摩經』は不思議を以て宗と為¹⁰⁴、『大集經』は陀羅尼を以て宗と為¹⁰⁵。今此の經も亦た陀羅尼を以て宗と為、一切法を以て經体と為。所以に『華嚴經』附録四右に「旧華嚴」を引く。是に同じ。に云く、一切世間、諸仏の境、皆な悉く能く法輪を転ぜしめ、法に於て自在にして縛無し。是れを如来の眞実智と謂う¹⁰⁶。又、契經に教体を説くに、其れに兩種有り。一は文を以て教体と為、二は義を以て教体と為。此に総じて一切を攝す。今は一切法を以て教体と為。此れ即ち第五に經の宗体を出し竟んぬ。

第六に聽法の軌儀とは、『大集』高基本・上巻六丁右『經』に依りて云わば¹⁰⁷、説法者は三種の想を作せ。第一に医王の想を作し、第二に救病の想を作し、第三に拔苦の想を作す。聽法者も亦た三種の想を作せ。第一に甘露の想を作し、第二に醍醐の想を作し、第三に除病の想を作す。又、『智度論』に云く、「聽法者は一心に端視して、渴して漿しやうを思うが如く、飢えて食を思うが如く、法を聞きて歡喜すべし¹⁰⁸」と。又、『智度論』に云く、¹⁰⁹聽法に其れ三種有り。一は恭敬供養、二は受持読誦、三は繫念けんねん思惟なり。第一の恭敬供養とは、是れ身業の善、能く聞慧を生じて三種の福を得。一は長命人相具足長命の人相を具足す、二は大富饒財宝大いに財宝富饒なり、三は蓮華化生蓮華より化生す¹¹⁰なり。第二の受持読誦とは、是れ

口業の善、能く思慧を生じて四種の福を得。一は所言人信（言う所、人信ず）、二は所言人順（言う所、人順ず）、三は眷属団円、四は不被誹謗（誹謗を被らず）なり。第（高基本・上 卷六丁左）三の繫念思惟とは、是れ意業の善、能く修慧を生じて三種の福を得。一は衣食自然、二は得大端正（大端正を得）、三は得大智慧（大智慧を得）なり。此れ則ち、是れ第六に聴法の儀軌を竟んぬ。

第七に見聞の得利とは、其れに兩種有り。一は見聞得利、二は不見不聞不得利なり。一は見聞得利（見聞して利を得）とは、『涅槃經』に曰く、¹¹¹若し善男子・善女人有りて、一たび大乘經を聞き、億百千劫に三塗・八難に墮せず。又、『涅槃經』に云く、¹¹²一恒河沙の諸仏の前に於て善根を種え、暫く大乘經を聞くことを得。二恒河沙の諸仏の前に於て善根を種え、大乘經を聞くことを得て、誹謗を生ぜず。三恒河沙の諸仏の前に於て善根を種え、能く歡喜礼拝す。四恒河沙の諸仏の前に於て善根を種え、能く書写し流（中統藏本 一八四右）通す。五恒河沙の諸仏の前に於て善（高基本・上 卷七丁右）根を種え、能く受持し誦誦す。明かに大乘經甚だ得難きを知んぬと云云。又、此の經の下文に、「若し須臾にも此の陀羅尼を聞くを得ること有らば、千劫已来、積造の悪業の聞は、悉く消滅して、更に復た悪道の身を受けず。当に諸仏の浄土に生ずべし」¹¹³と。又、『涅槃經』に曰く、¹¹⁴仮使い人有りて王の庫藏を開き、一日布施して得る所の功德、無量無辺なりとも、人有りて一口（ひちくち）に仏の功德を称するに如かず。何に況や大乘經典を聞くを得んをや。又、『提謂經』に曰く、「聴法を論ぜずとも、但だ寺に入らば、即ち五種の功德を得。一は端正に三寶を見て、

心に歡喜を生ずるを為す故なり。二は好声に念仏を為す故なり。三は天に生じて惡業余らざるが故なり。四は尊貴もて一切三宝に礼するを為す故なり。五は(大正藏本 一〇一四)涅槃を証することを得て余の福有りと為すが故なり¹¹⁵」。

第二に不見不聞不得利(見ず聞かずして利を得ず)とは、其れに七種有り。一は造惡の衆生、(高基本・上 卷七丁左)二は受樂の衆生、三は地獄の衆生、四には餓鬼の衆生、五は畜生の衆生、六は病患の衆生、七は遠行の衆生¹¹⁶なり。第一の造惡の衆生とは、十惡・五逆を貪造して經を聞くことを得ずと云云。第二の受樂の衆生とは、人間の富貴者の如きは、衣は羅綺¹¹⁷を以い、食は酒肉を以い、若しは上界の諸天に於て三鉢衣¹¹⁸を着し、五欲樂貪して快樂を受け、經を聞くことを得ずと云云。第三の地獄の衆生とは、八地獄・四増・十六隔等の為に、皆な刀山有りて目に滿じ、劍樹は身を侵^{おか}して、猛火は上^{かみ}を焼き、刀輪は下^{しも}を切り、受苦を貪るが故に經を聞くことを得ずと云云。第四の餓鬼、第五の畜生、第六の病患、第七の遠行、此の四種は義意を以て之を釈すと云云。

第八に(亮法注・上卷 科註 二丁右)經の題目を釈すとは、其れに三種有り。一に仏頂尊勝陀羅尼と名づけ、(高基本・上 卷八丁右)二に延寿と名づけ、三に善吉祥と名づく。「仏」と言うは、三覺¹²⁰の号なり。故に名づけて仏と為。「頂」とは一身の勝なり。立つるを以て頂と名づく。「尊」とは三世の如來の共に尊ずる所の故なり。「勝」とは二乗の及ばざる所の故なり。「陀羅尼」とは翻じて(亮法注・上卷 科註 二丁左)總持^{そうじ}と云う。總持の義、其れに四種

有り。具には上に説くが如し。故に『仏頂尊勝陀羅尼經』と言う。

第九に翻訳の時節とは、西南の国、罽賓けいひん¹²¹と名づくるに婆羅門ばらもん有り。名は仏陀波利なり。生れて末法に居し、聖容を覩ず。遍く凶書を覽て、經論を披檢するに、大士文殊師利、五臺山ごたいざんに在いまして、諸菩薩の爲に『華嚴經』を説きたまうことを聞く。¹²²遂に即ち錫杖を身に随え、衣鉢を体に随え、天竺より發ちて震旦たん¹²³に來詣す。儀鳳元年ぎほうげんに至りて五(亮法注・上卷・科註・二二右)臺山たいざんの下かみもとに到る。黒雲鬢髮あひあひ、白霧莽莽もつもつたる有りて、來路らいじゆを知るしこと莫し。去道、誰か弁ぜん。遂に即ち誠心に頂礼し、五体もて歸依す。(高昇本・上卷八十一左)須臾しゆゆの間、雲開けて霧散じ、煥然かんぜんとして除蕩じよとう¹²⁶し、煙雲有ること無し。次いで復た前まへに行くこと数十余里、乃ち地に高山聳え、天に翠嶺すいれい連らぬを見る。神を崇めて志を勵し、徐おもむろに歩みて緩ゆるやかに登り、五里已來を過ぐ。忽に瑞雲、蓋かきの如きなるを見る。乃ち益悲泣ますますす。涙を流して合掌し、歎じて曰く、「人は是れ凡人、聖は是れ大聖なり。冥加めい加¹²⁷にあらざるよりは、何を以てか(中統藏本一八四左)見ることを得ん」と。

未だ首こゝを挙げざる頃、忽に一老人を見る。素服皓首そふくこうしゆ¹²⁸にして、儀宇肅然たり。婆羅門の音を具し、仏陀波利に謂いて曰く、「大徳よ、遠くより來たる、甚だに辛苦なり」と。波利の曰く、「故こゝに來たりて文殊を礼謁す。豈に辛(亮法注・上卷・科註・二二左)苦を辞せん」と。老人の曰く、「此土の衆生、罪を造る者は多く、福を修める者は少し。死して地獄に入る者は無量無辺、諸の浄土に生ずる者は万が中に一も無し。其れ尊勝陀羅尼は、甚だ此土の衆生を救う。不審いふかし、大徳よ、經を將もち來たるや以い否なや。

仏陀波利の曰く、「但だ是れ(高基本・上巻九丁右) 経論、一も將もち来たらず。但だ文殊を礼拝せんが為なり。故に此に来至す」と。老人の曰く、「大徳よ、却しりぞいて西国に還て、此の経を取り来て、広く群品を利し、天堂の門を開き、地獄の苦を濟うべし。後に会して相まい見みえば、必ず文殊を示さん。縦い今、見ることを得れども、未だ必ずしも識ること能はず」と。言い訖て忽然として見えず。

時に仏陀波(亮法注・上巻・科註参丁右) 利は所親を喪そうするが如く、悲泣し懊惱せり。是に於て杖策して西に乗ず。屢しばしば、寒暑に移り、周遊すること九万里、来去すること十余年なり。永淳二歳29、還て大唐に至る。將もつ所の梵本、宮闕きゆうけつに奉進す。並に老人の事由を具し、委悉しにして同時に俱に奉ず。是の月、屢問しばしばを垂ることを蒙り、優賓特殊なり。爰に右司に勅して、絹三十匹を賜う。時に中天竺国の訳経の三蔵・地婆訶羅じばから、唐には日照と云う。風を五印に宣べ、化を九州に流す。勅して此の法師を請し、並に典客令・杜行顛等とこうぎを追て、内に於て翻訳せしむ。翰簡、斯に(高基本・上巻九丁左) 畢て于聖に奉獻す。曾て未だ聞かざる所なり、常の珍敬に倍す。毎日、先に披ひらくこと数遍して、後(亮法注・上巻・科註三丁左) に万機を履ふみたもう。之を内宮に秘して、外に有らしむること無し。波利、竊ひそかに惟おもいて云く、「応感するに此の神人、備つぶさに説かく。尊勝の功能は、此土の含生、潤を蒙むること、豈に復た九重134、頼み有り、万姓、憑よりぞ無からんや。比者、命を委ゆたね、生を捐すて、労苦を辞せざることは、天人福利し、幽顕の安有らんことを冀望す」と。是に於て表をもて紫微しびに叫こいぶ。「庶こいねがわくは玄沢を流して、載すまわち經本を布し、未聞に伝示したまえ」と。皇上、此の懇誠を感れんで、其の前志を允ゆるす。勅すらく、未だ訳さざる者を附し、已に訳する者を留め、既に本懐を遂げ

しめんと。悲欣交集¹³⁷まり、頂戴し、跪受して恒の心に百倍す。

然れども貝葉の天文、未訣の句義、若し重ねて訳すること無くんば、豈に将来を訓ぜんや。沙門・順¹³⁸眞は西明寺の僧なり。妙に(発法注・上巻・科註 四丁右)梵語を閑い、あまね弥く経文を解す。乃ち大徳・測法師¹³⁹、並びに罽賓三蔵⁴⁰と与に、西明寺に於て、再び更に翻(高基本・上 卷十丁右)出す。

即ち日照三蔵は先に訳する所、波利法師は後に翻ずる所なり。文質は少異なりと雖も、義理は殊ならず。其の両本を尋⁴¹めるに、是れ永淳二年の翻なり。波利は還て梵本を齎⁴²し、五臺山に入る。爾れより今に迄るまで音塵、嗣ぐこと無し。是に知んぬ、大権の方便、文殊の引接なり。千歳の一遇、其れ此の謂いか。羅什の古訳⁴³、還て一本有り。

注

- 1 『大正藏經』に収録される漢訳經典としては、仏陀波利訳『仏頂尊勝陀羅尼經』(大正藏九六七番)、杜行顛訳『仏頂尊勝陀羅尼經』(同九六八番)、地婆訶羅訳『仏頂最勝陀羅尼經』(大正藏九六九番)、同『最勝仏頂陀羅尼淨除業障呪經』(同九七〇番)、義淨訳『仏説仏頂尊勝陀羅尼經』(同九七一番)がある。その他、儀軌を含めて関係資料としては、不空訳『仏頂尊勝陀羅尼念誦儀軌法』(同九七二番)、伝善無畏訳『尊勝仏頂修瑜伽軌儀』(同九七三番)、法天訳『最勝仏頂陀羅尼經』(同九七四番A)、『仏頂尊勝陀羅尼』(同九七四番B)、武徹述『加句靈驗仏頂尊勝陀羅尼記』(同九七四番C)、伝不空訳『仏頂尊勝陀羅尼注義』(同九七四番D)、『仏頂尊勝陀羅尼真言』(同九七四番E)、若那訳『仏頂尊勝陀羅尼別法』(同九七四番F)等がある。

2 不空(Amoghavajra)は、『金剛頂經』『理趣經』等の数多の密典を翻訳するとともに、大興善寺を拠点に密教宣布に勤めた

ことで知られ、真言密教の付法第六祖に数えられる。

3 『貞元録』の読解にあたり、川崎大師平間寺所蔵の版本を参照した。川崎大師関係各位のご高配につき、紙面を借りて御礼申し上げたい。

4 『表制集』巻一「請置大興善寺大徳四十九員 勅一首」。

「…(中略)…法崇…(中略)…前件の大徳四十九人、並に道業は清高にして、経戒に洞明す。衆の欽尚する所にして、師範爲るに堪う」(『大正藏経』五二卷八三〇頁中〜下段)

高基は、右表制の他、果宝口・賢宝記『理趣秘要鈔』四の「法宗法師は、不空三蔵の面受弟子なり云々」(高基本「付録」三丁右)を引いている。

5 『表制集』巻一「化度寺文殊師利護国万菩薩堂三長齋月念誦僧二十七人」。

「…(中略)…千福寺の大徳 法崇…(中略)…去年十二月二十三日の恩命を奉じ、香を賜り、兼ねて口勅を宣せられ、不空に命じて念誦の大徳を簡択せしめ、及び寺主智蔵に命じて専ら道場を檢校せしむ。其れ前件の大徳等、或は業は真言に茂え、学は戒律に通ず。或は妙旨を敷宣し、真乗を転読す。望みて抽くに此の中に住し、毎年三長齋月に道場を精建し、国の為に念誦せしむ」(『大正藏経』五二卷八三四頁下段〜八三五上段)

6 『表制集』巻一「請再訳仁王経 制書一首」(『大正藏経』五二卷八三一頁中段)。「仁王経」の再訳については、『貞元録』により詳しい記事が見られる。

「再び『仁王護国般若波羅蜜多経』二巻を訳す。右一部二巻、大興善寺三蔵沙門不空の奏する所、此れ第四訳に当つ。…(中略)…永泰元年四月二日、恩旨頒下して斯の経を訳せしむ。爰に京城義学の大徳を集めて、制に応じて翻訳す。一十七人の三蔵、大興善寺の沙門三蔵不空、梵本を訳す。大聖千福法花寺の沙門法崇、梵本の義を証す」(『大正藏経』五五卷八八四頁中〜下段、版本巻第一五の一七丁右〜左)

7 訳場における役割については、船山徹『仏典はどう漢訳されたのか―ストロが経典になるとき』に詳しい。証梵文義とは、

- いわゆる証義と考えられる。同書五八頁(北宋の天息災の訳場の事例)では、証義について、「訳主の左に坐り、訳主と共に梵語の文(の意味内容に何か問題がないか)を討議する」としている。
- 8 「其の『虚空藏菩薩所問經』は、即ち代宗睿文武皇帝の大曆年中、第五訳に当つ。特進試鴻臚卿大興善寺の三藏沙門大広智不空、梵文を宣訳す。……(中略)……訳語の大徳、千福寺の沙門法崇、梵文を証す。兼ねて『大虚空藏菩薩念誦法』一卷を訳す」(『大正藏經』五五卷八八七頁下段〜八八八頁上段、版本卷第一六の七丁左〜八丁左)
- 9 宗叡撰『新書写請来法門等目錄』(大正藏二二七四番A)に、「仏頂尊勝陀羅尼經疏一部二卷」(『大正藏經』五五卷一一〇頁中段)と記載されている。
- 10 高基本「付録」一丁右でも、宗叡『新書写請来法門等目錄』に記載について、「作者名を闕す」と疑問を呈すが、「恐らくは是れ今の疏ならん」と述べている。
- 11 法宗疏が『貞元録』に収録されなかつた理由は不明であるが、本書を読み始めいくつか気になる点がある。その一つは、各種の經典目錄で疑偽經典と指摘された『提謂波利經』を積極的に用いる点である(後述)。また本書では、具体的な經典・論書名を出しながらも、その引用と目される本文が、まったく現存の『大正藏經』等の本文と一致しない傾向が看取される(ややもすると不正確な引用に見える)。法宗は何を目的に、誰を讀者と想定し、いかなる經典・論書を参照したのか、すべての国訳を終えた上で再考を試みたい。
- 12 松長有慶『密教の相承者―その行動と思想』(評論社、一九七三年)一八〇〜一八一頁(文殊信仰の流布)、岩崎日出男「不空三藏の五臺山文殊信仰の宣布について」(『密教文化』一八一、一九九三年)、山口史恭「中国―中期密教の請来と展開」(『空海とインド中期密教』一一六頁、春秋社、二〇一六年)等。
- 13 『表制集』巻二「請太原号令堂安像浄土院抽僧 制書一首」。
- 「太原府の大唐興国太崇福寺は、高祖神堯皇帝の義を起す処に中る。号令堂は普賢菩薩像一鋪を安置することを請う。浄土院は灌頂道場処にして、二七の僧を簡択し、国の奉為に仏頂尊勝陀羅尼を長誦することを請う」(『大正藏經』五二卷八三七頁下段)

14 『仏頂尊勝陀羅尼念誦儀軌法』は、『表制集』の自撰録に記載されることから、七七一年以前に存在したことは間違いない。本資料の訳出年次について、唯一言及するのが、慧琳撰『一切経音義』（大正蔵二二二八番）であり、広徳二年（七六四）と明記する。

「又、代宗文武皇帝の広徳二年甲辰歳に至て、三蔵大広智不空、長安大興善寺に於て『仏頂尊勝念誦供養法』一卷二十紙を訳出す。沙門飛錫、筆授す。此れ第八訳なり」（『大正蔵経』五四卷五四四頁上段）

しかし、その年次の典拠が示されないことから、論者は七七〇年に前後する翻訳編纂である可能性を考えたい。

15 『表制集』巻五「天下の僧尼に勅し、尊勝真言を誦せしむ制、一首」（『中統蔵経』一〇四卷二五〇丁左、『大正蔵経』五二卷八五二頁下段）。編纂当初の法崇疏に存在したか不明であるが、現行の法崇疏冒頭には、経典注釈に先立って、当表制を含む三首が列記される（後述）。

16 亮汰注については、「京都大学貴重デジタルアーカイブ」において電子公開された京都大学附属図書館蔵本を閲覧した。

17 「各各の文処に一字千字を上にし、単圓を下して電覽の易きに便りす。其の余、全く梅尾の蔵本に同なり」（高基本「付録」一丁右）

18 「此の疏の科註・冠註、已に世に行ずと雖も、『疏』の全篇を写さざれば、経の伝来を顕すこと能わず。惜しい哉、今全玉を刻して、代宗、僧尼をして神咒を誦せしむるの事縁と、文殊度生の深重なると、三蔵寶西天来去の辛勤を知らしめんと欲す。是れ開板者高の素志なり」（高基本・「付録」一丁左）

19 「中国の在家仏教特に庶民仏教の一經典―提謂波利経の歴史―」（『塚本善隆著作集』第二卷『北朝仏教史研究』大東出版社、一九七四年）二〇三―二〇八頁に詳しい。

20 牧田諦亮「敦煌本提謂経の研究（上）―安世高訳分別善惡所起経との類似」（『仏教大学大学院研究紀要』一、一九六八年）、『牧田諦亮全集』第一卷（疑経研究、臨川書店、二〇一四年）参照。四種の敦煌本とは、ブリティッシュミュージアム本（スタイン本二〇五一番）、北京図書館蔵本、ソ連アジア民族研究所本、フランス国立図書館本（ペリオ本三三三三番）である。

牧田は前三本を『提謂波利經』の下巻、後の一本を上巻に同定している。

21 法宗疏の『提謂波利經』引用をうけて、高基は「付録(四丁左〜五丁右)」において本經について考察をまとめている。

22 山口大輔『提謂波利經』佚文補遺(『仏教学研究』六七、二〇一一年)、同『提謂波利經』散佚部分の教説(『印度学仏教学研究』六〇―二、二〇一二年)参照。

23 曩者とは、さきごろの意。「さきに」とも訓ず。曩昔・曩時・曩日ともいう。

24 仏陀波利(Buddhapali:七世紀)とは、北インドのカシミール出身の僧。文殊菩薩を礼拝するために、中国・五臺山を訪れ、そこで一老人からの聖囑を受けて、後にインドから『仏頂尊勝陀羅尼經』の梵本を將來したと伝えられる。仏陀波利自らが翻訳したものが、『仏頂尊勝陀羅尼經』(大正蔵九六七番)であり、その序文において中国への請来事情が述べられている。

25 文殊菩薩は五臺山(中国山西省東北部)に住し、常に説法していると広く信じられ、インドをはじめアジア各地から巡礼の僧が訪れた。文殊の住処について初めて言及する經典は、『華嚴經』である。ここでは、「東北方に菩薩の住処有り、清涼山と名づく。過去の諸菩薩は常に中に於て住す。彼に現に菩薩有り、文殊師利と名づく」(大正蔵二七八番・『大正蔵經』九巻五九〇頁上段)と記される。

日比野丈夫・小野勝年『五台山』(東洋文庫五九三)によれば、中国・五臺山は西晋(二六五〜三一六年)の頃、神仙道によって開かれ、後に北魏(三八六〜五三四年)の末頃に至り、文殊菩薩の聖地として徐々に認知されていったとされる。その要因として五臺山が長安、洛陽からみて東北方に位置していたことが挙げられている。

景龍四年(七一〇)、菩提流志訳『文殊師利宝蔵陀羅尼經』では、「我が滅度の後、此の瞻部洲東北方に於て国有り、大振那と名づく。其の国の中間に山有り、号して五頂と為。文殊師利童子、遊行居住す」(大正蔵一一八五B番・『大正蔵經』二〇巻七九八頁上〜中段)と記されており、同時期には「文殊菩薩の住処」中国の五臺山」という認識が確立され、經典翻訳にまで影響を与えていたと推測される。

26 五訳とは、仏陀波利訳『仏頂尊勝陀羅尼經』(大正蔵九六七番)、杜行顛訳『仏頂尊勝陀羅尼經』(同九六八番)、地婆訶羅訳『仏

頂最勝陀羅尼經』(同九六九番)、同『最勝仏頂陀羅尼淨除業障呪經』(九七〇番)、義淨訳『仏説仏頂尊勝陀羅尼經』(同九七一番)である。五訳の成立順・関係等については拙論『尊勝陀羅尼成立考』(二〇〇七年、『真言密教と日本文化』下、ノンブル社)等参照。

27 不空 (Amoghavajra: 七〇五〜七七四) は、インド出身の僧で(諸説あり)、真言付法の第六祖とされる。金剛智や龍智に師事して、特に金剛頂系の密教に精通し、三巻本の『金剛頂經』や『般若理趣經』等の重要經典を訳出し、中国密教の興隆に貢献した。不空は晩年、文殊の聖地である五臺山の造宮に尽力し、仏頂尊勝陀羅尼の流布にも力を入れ、その読誦を勧め、関連する儀軌を作った。法宗が『仏頂尊勝陀羅尼經教迹義記』を撰述した背景には、これらの不空の事跡が関係する可能性がある。28 法宗は不空と交流のあった千福寺の僧で、『仏頂尊勝陀羅尼經教迹義記』を撰述した。詳しくは前述「二、撰者・法宗について」を参照。

29 土砂加持の機能を讃えるものであり、『仏頂尊勝陀羅尼經』の「其の亡者の身分に随つて骨を取り、土一把を以て、此の陀羅尼を二十一遍誦して、亡者の骨の上に散せば、即ち天に生じることを得ん」(『大正藏經』一九卷三五一頁下段)にもとづく。30 『仏頂尊勝陀羅尼經』の「若し人、能く此の陀羅尼を書写せば、高幢の上に安じ…(中略)…幢等の上に於て、或は見、或は与に相い近づき、其の影、身を映じ、或は風、陀羅尼の上を吹き、幢等の上の塵、落ちて身上に在らば、天帝よ、彼の諸衆生の所有罪業をもて、応に惡道、地獄・畜生・閻羅王界・餓鬼・阿修羅身に墮すべきも、惡道の苦、皆な悉く受けず。亦た罪垢の為に染汚せず」(大正藏一九卷三五一頁中段)にもとづく。仏頂尊勝陀羅尼を納めた幢等の高所に積もった塵が、風に吹かれて落ち、身に降りかかっただけでも、惡趣の苦が除かれるという。この功德記事にもとづき、仏頂尊勝陀羅尼を刻した石製の經幢(尊勝經幢)が、中国全土で建立された。

31 南山基公とは、高野山龍光院の高基のことで、『仏頂尊勝陀羅尼經教迹義記』を開板した。詳しくは前述の項「四、法宗疏のテキストについて」参照。

32 魚魯の両字は形が似ていて誤りやすい(魚魯之謬)。転じて字形の類似から文字を写し間違えることをいう。

- 33 梓とは版木のこと。『疏』の木版を作ることににより、広く天下に流布したことを述べる。
- 34 蜀錦とは、蜀の錦江の水で糸をさらして織った美しい錦である。一方の襪縷とは、はだにつける下着、やぶれた衣服の類をいう。ここでは美しい錦をわざわざ裁断し、ボロ布に縫い合わせることに喩える。
- 35 隋珠とは、濮水の神蛇が献じた宝珠であり、隋王朝において国宝とされた。ここでは貴重な宝珠をわざわざ砕いて、粉々にすることに喩える。
- 36 安永己亥とは安永八年(一七七九)。
- 37 智暉(一七一七〜一七八四)は、江戸時代中期に活躍した真言僧。播磨国(兵庫県)の生まれで、明石宝蔵寺、智積院、西明寺などで密教・律などを学び、後に春日寺や小山寺に止住して数多くの経論の注釈研究や開板を行った。
- 38 代宗(七二六〜七七九)とは唐朝十一代皇帝であり、諡号が「睿文孝武」である。
- 39 『表制集』巻五「天下の僧尼に勅し、尊勝真言を誦せしむ制、一首」(『正統蔵経』一〇四卷二五〇丁左、『大正蔵経』五二卷八五二頁下段)と同「だが、若干本文が相違する。
- 40 大暦十一年は七七年。不空没後の翌年にあたる。
- 41 内謁者監とは正六品下とされる官職。李憲誠については、塚本善隆『塚本善隆著作集』第三卷(大東出版社、一九七五年)の「宦官李憲誠と内功德使」(二五九〜二六〇頁)に詳しい。李憲誠は、代宗皇帝に仕えた有力な宦官であり、不空より受法して俗弟子になった。李憲誠は、代宗と不空の間を立て、仏教興隆に尽力したことから、不空は臨終時に李憲誠のことを、「護法菩薩」と称賛したという。
- 42 この乗如による表制は、『表制集』『貞元録』に記載なく、法宗疏のみに収録されることから重要である。高基も、「如公の表出処、未だ考しえず」(高基本「付録二丁右」と述べている。
- 乗如については、『表制集』巻一「大興善寺に大徳四十九員を置くを請う」に「東都敬愛寺僧乗如」(『大正蔵経』五二卷八三〇頁中段)の記載がある。沙門乗如の概略については、贊寧等撰『宋高僧伝』(大正蔵二〇六一番)収録の「唐京兆安

国寺乘如伝」(『大正藏經』五〇卷八〇一頁下段)に詳しい。

43 拈躍とは手を打って踊り喜ぶこと。

44 三草とは『法華經』薬草喻品に説かれる三草二木の喩に由来するか。三草とは上草・中草・下草、二木とは大樹・小樹のことで、衆生の機根が種々なることを表す。ここでは天子の慈雲が、普く衆生に等しく恩寵を与えることを表す。

45 皇沢とは天子からの恩恵・恩沢のこと。

46 氛霧とは不吉なもやの意で、天子に反逆する賊を喩える。

47 緇林とは黒衣を着た衆僧の集まりを林に喩える。僧団・寺院のこと。

48 批とは、天子が臣下から提出された文書をつき合わせ、よしあしを判定すること。沙門乘如等の言に対する代宗皇帝の答辞である。

49 領袖とは襟とそで。襟とそでは人目に立つことから、転じて集団の主、指導者を表す。

50 愜当とは、適合して過不足がなく、満ち足りること。

51 『表制集』巻五「尊勝真言を誦持せしめらるを謝す表、一首 併せて答」(『中統藏經』一〇四卷二五〇丁左、『大正藏經』五二卷八五二頁下段)と同一だが、若干本文が相違する。

52 慧朗については、松長有慶『密教の相承者―その行動と思想』二二八頁等に詳しい。崇福寺の慧朗(生年不詳七七八)は不空の高弟六哲の随一とされ、巖野『不空三藏碑文』や超遷『不空三藏行状』等において、不空の後継者として付法第七祖に位置づけられる(慧朗は不空入滅時点で高齢であったため、実質的には恵果が付法第七祖になったとされる)。

「而して沙門慧朗、次補の記を受け、伝灯の旨を得て、仏日を継明し、六を紹いで七と為る」(巖野『不空三藏碑文』:『大正藏經』五二卷八六〇頁中段)

「僧弟子慧朗、次いで灌頂の位を承く」(超遷『不空三藏行状』:『大正藏經』五〇卷二九四頁上段)

53 蒼生とは多くの人民、津梁とは渡し場の橋。仏頂尊勝陀羅尼が普く生類をさとの世界に渡すことを讃える。

- 54 緇門とは仏門の意。緇とは黒の意であり、僧の着る黒衣を表す。
- 55 無疆とは際限がないこと。無限の意。
- 56 至道とは、この上ない最高の道義、生き方の指針。
- 57 誨誘とは、わからない者を教え諭して、善き方向へ誘うこと。
- 58 妙途・至道とは菩提に至る仏の道のことであり、凝邃・希夷はその教えの奥深きことを表す。
- 59 昏衢積闇とは夕暮れの街が闇で覆われること、苦海横流とは苦が海のごとく広がることで、迷える衆生の喩え。迷える衆生は、
仏の慧炬（智慧）や慈舟（慈悲）によって道理に目覚め、救われる。
- 60 智慧と慈悲にもとづく仏の救いは、あらゆる世界、あまねく煩惱に惑う衆生に行き渡っており、無数の天人の中でも、仏の教導によつて稀に無明の境界を出る者もいるという。その一例が『仏頂尊勝陀羅尼經』の主人公・善住天子である。
- 61 善住天子とは、『仏頂尊勝陀羅尼經』の主人公であり、仏が説示した陀羅尼の力によつて、七日後の命終、悪趣への転生の危機を回避したとされる。
- 62 神勝殿 (Vijayanta) とは、帝釈天 (Indra) が居住する宮殿と推測される。
- 63 善住天子は前世における三宝帰依や十善の善因によつて、三十三天に生まれることができたが、天界では天女たちに囲まれ、遊戯や娯楽等に耽り、自堕落な生活を送っていたという。
- 64 千齡の積慶とは、多年にわたり積み重ねられた喜び。天界の喜樂は莫大であり、尽きることがないことを表す。
- 65 『仏頂尊勝陀羅尼經』の「爾の時に善住天子、即ち夜分に於て声有り、言うを聞く。「善住天子、却て後七日にして命、將に尽きんと欲す。命終の後、瞻部洲に生じ、七返畜生の身を受く。即ち地獄の苦を受く。地獄より出て、希に人身を得るも貧賤に生じ、母胎に処して即ち兩目無からんと」(『大正藏經』一九卷三五〇頁上段) にもとづく。
- 66 善住天子は七日の命終後、畜生や地獄などの悪身を度重ねて受けることを表す。
- 67 喜見の尊とは、須弥山頂の喜見城に住む帝釈天 (Indra) のこと。本經において帝釈天は、七日後命終の危機に瀕した善住

天子の相談を受け、その救済のために代わって仏所を訪問すると説かれる。

68 栴提とは釈提桓因 (Sakradevānam Indra) の略称であり、帝釈天を表す。

69 金山とは金の山。『妙法蓮華經』に「身色は金山の如し」(『大正藏經』九卷四頁下段)と記すように、金山をもって仏身に喩える。

70 『仏頂尊勝陀羅尼經』の「爾の時に如来、頂上より種々の光を放ち、十方の一切世界に遍満し已んぬ。其の光、還り来つて仏を三匝に繞り、仏の口より入る。仏、便ち微笑して帝釈に告げて言いたまう」(『大正藏經』一九卷三五〇頁中段)にもとづく。仏は陀羅尼の説示に先立ち、頂上肉髻より光を放つて一切世界を巡らせ、その後光は仏の口に入り、微笑を浮かべたとされる。紺頂とは、紺青色の毛髮を蓄えた仏の頂を表す。

71 橋尸迦 (Kausika) の略称。橋尸迦とは、帝釈天が過去、人間であつた時の姓。

72 四弁とは四無礙弁の略称。仏の説法は、法(教え)、義(教えの意義内容)、辞(諸方の言語)、楽説(弁舌の自在)の四種において滞りが無い。

73 本經の「爾の時に善住天子、此の陀羅尼を受け已り、六日六夜を満じ、法に依て受持するに一切の願満す。応に一切惡道等の苦を受くべきも、即ち解脱を得て、菩提の道に住し、寿を増すこと無量なり。甚だ大に歡喜し、高声に歎じて言く、希有なり如来、希有なり妙法、希有なり明驗、甚だ得難きと為」(『大正藏經』一九卷三三二頁上段)にもとづく。善住天子は、六日修行の後に救われ、①如来と②妙法と③明驗の三つが希有なることを讚歎した(三希の歎)。

74 金地とは仏が住する場所、仏寺の類を表す。金田ともいう。『釈氏要覽』の説によれば、須達長者が金を敷き詰めて、祇陀太子より園林を買い、祇園精舎を建立して釈尊に寄進した故事によるという。高基「付録」三丁右参照。

75 『仏頂尊勝陀羅尼經』の「爾の時に世尊、金色の臂を舒べて、善住天子の頂を摩して、為に法を説き、菩提の記を授けたまう」(『大正藏經』一九卷三三二頁上段)にもとづく。いわゆる摩頂授記、摩頂灌頂である。

76 都名とは全てのものに通じる名称のこと。

77 本經中に説かれる土砂加持の功能、陀羅尼を納めた高幢等から落ちる塵の功德を表す。

- 78 本経では仏頂尊勝陀羅尼の功能をもって、「日藏摩尼之宝」「閻浮檀金」(『大正藏経』一九卷三五一頁上〜中段)に喩える。閻浮檀金 (Jambudāsavarṇa) とは、須弥山南の大陸 (閻浮提) のうち、閻浮樹林に流れる川底に産する砂金のこと。
- 79 両足とは両足尊の略称で、仏陀に対する尊称のひとつ。雄名は仏陀の名のこと。雄とは「偉大な雄牛」を意味するゴータマに由来。
- 80 頂とは、仏の三十二相の随一とされた「頂上肉髻相」に相当する。
- 81 四義とは四種陀羅尼のこと。すなわち法陀羅尼 (教法を闡持する)、義陀羅尼 (諸法の義を総持する)、咒陀羅尼 (秘密の咒を総持する)、忍陀羅尼 (法の実相に安住する)。幽宗とは隠れた意味のこと。高基「付録」三丁左参照。
- 82 八十八恒とは八十八恒河沙の略称。恒河沙 (Gāṅgādvāṅka) とはガンジス河の砂のことで多数・無数の喩。無数の衆聖が、異口同音に本経の教えを説くことを表す。
- 83 龍樹造・鳩摩羅什訳『大智度論』の取意引用。『大正藏経』では、「何者是仏法。仏法有五種人説。一者仏自口説。二者仏弟子説。三者仙人説。四者諸天説。五者化人説」(『大正藏経』二五卷六六頁中段)と記される。
- 84 室羅筏国 (Śrāvastī: 舍衛城) とは、コーサラ国の商業都市。現在のサハート・マヘート。
- 85 勝軍王とはコーサラ国王・波斯匿王 (Prasenajit) の異称。
- 86 四生とは、生類を生まれ方で四種に分類したもの。胎生・卵生・湿生・化生。
- 87 督多林 (Jetavana) とは、波斯匿王の子である祇陀太子 (Jeta: 戦勝の意) が所有した園林のこと。須達長者は金を敷き詰めて園林を買い取って、積尊に寄進し、後に祇園精舎が建立された。
- 88 戦勝太子とは、祇陀太子 (Jeta) の異称。
- 89 七覚法とは七覚支とも呼ばれる。菩提を得るための七種の法。念覚支 (念をもって憶持する)、択法覚支 (智慧をもって簡択決定する)、精進覚支 (勤をもって精励する)、喜覚支 (欣悦歓喜する)、軽安覚支 (心身を軽安にする)、捨覚支 (捨離して寂静となる)、定覚支 (禪定によって心を安住させる)。

- 90 慈蔭とは慈悲による蔭覆、すなわち仏の慈悲を被り、衆生が利益・守護されることを表す。
- 91 給孤独園とは、コーサラ国の舎衛城の長者・須達(Sudatta)が、釈尊に寄進した園林のこと。須達は、孤独な貧者によく食物等を給したことから「給孤独長者」とも呼ばれる。須達は、祇陀太子(Jeta)所有の園林に金を敷き詰めて買い取り、釈尊に寄進したことで知られる。このような経緯を反映して「祇樹給孤独園」と呼ばれ、後に祇園精舎が建立された。
- 92 『大智度論』中に同文は見当たらない。高基本にも「智論」等の文、兎馬象の文無し」と述べ、「恐らくは『智度』の羊馬神通なるか。『涅槃經釋』二十五、『優婆塞戒經』一十六。兎馬象の譬、近くは『大日經疏』二末に有り」(高基本「付録」三丁左)とある。しかし、『大日經疏』にも同様の文は見いだせない。智顛撰『維摩經玄疏』(大正蔵一七七七番)には、「譬如三獸渡河。水雖是一兔馬象脚有短長。故入水不無淺深之別。水雖是一而深淺有異也」(『大正蔵經』三八卷五五頁下段)という近似した文が見られる。
- 93 高基は『法華經』に三子等と云うは、譬喩品の知諸子先心各有所好等の文の取意なり」(高基「付録」三丁左)と述べる。『妙法蓮華經』の「父知諸子先心各有所好。種種珍玩奇異之物。情必樂著」(『大正蔵經』九卷二二頁下段)の取意とも考えられるが、本文は大きく乖離する。
- 94 鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』(大正蔵二六二番)の「方便品第二」に「若以小乗化 乃至於一人 我則墮慳貪」(『大正蔵經』九卷八頁上段)とあるが、やや文が相違する。
- 95 鳩摩羅什訳『維摩詰所説經』(大正蔵四七五番)からの引用。「仏以一音演説法 衆生隨類各得解 皆謂世尊同其語 斯則神力不共法」(『大正蔵經』一四卷五三八頁上段)とある。
- 96 大梵王とは色界の初禪天の第三に住する天衆のこと。
- 97 高基は、『大智度論』に引く『密迹金剛經』からの「有人見仏身一丈六尺」(『大正蔵經』二五卷一二七頁下段)に注目し、その「有人」が「応持菩薩」に読み替えられたものと考察している(高基「付録」三丁左〜四丁右)。
- 98 菩提流志訳『大宝積經』(大正蔵三一〇番)では、「応持菩薩白仏言。我上過到若干仏土。不能得見釈迦文仏頂。不知高長

- 幾百千億江河沙仏土」(『大正藏經』一一卷五四頁中段)と記される。これは仏の八十種好の一つ、無見頂相(仏の頂上肉髻は誰も見ることができない)の徳を表す。前注に引いた『大智度論』の続きでは、「有人見仏身一丈六尺。或見一里十里百千万億乃至無辺無量遍虛空中。如是等名身密」(『大正藏經』二五卷二二七頁下段)とある。
- 99 失訳『大方便仏報恩經』に同文は見いだせない。高基は、『大方便仏報恩經』に説かれる「黄口小兒」(『大正藏經』三卷一三七頁上段)を引いて、「孩子想」と文意は同じとし、一方、「如声聞」以下は、同經に文が無いとしている(高基「付録」四丁右)。論者がみるかぎり、同經中に「若不持戒能修精進。尚不得人身。況得三十二相無見頂及肉髻相等無差別」(『大正藏經』三卷一六五頁中段)という無見頂相に関する記載は見られる。
- 100 法性身とは法身と同義。父母所生の肉身に対し、真如の法そのものを体とする仏身をいう。
- 101 『華嚴經』に同文は見いだせない。高基は、仏駄跋陀羅訳『大方広仏華嚴經』の「譬如盛満月 映蔽諸星宿 示現一切衆有増或有減 一切澄淨水 月影無不現 世間群生類 皆悉對目見」(『大正藏經』九卷六一八頁中段)等とする(高基「付録」四丁右)。しかし、多少本文が相違するものの、内容的には同經中の「譬如淨満月 普現一切水 影像雖無量 本月未曾二」(『大正藏經』九卷四八六頁下段)の取意と考える方が妥当である。
- 102 大乘の『大般涅槃經』では、一切衆生が悉く仏性を有することを主張する。
- 103 『大般若經』等の般若經類では、あらゆる相對を否定し、一切を空とみる智慧(般若)の完成を主張する。
- 104 『維摩經』では、大乘の目指すさとりは、言葉や概念を越えたもの、すなわち不可思議であることを主張する。
- 105 『大方等大集經』では、「陀羅尼自在王菩薩品」をはじめ、各品に数多くの陀羅尼が説かれている(特に前半では教法憶持のための陀羅尼、後半では呪句としての陀羅尼が説かれる)。
- 106 『華嚴經』に同文は見いだせない。高基は、仏駄跋陀羅訳『大方広仏華嚴經』の「一切世界如来境 悉能為転正法輪 於法自性無所転 無上導師方便説」(『大正藏經』九卷四二五頁上段)からの説文とする(高基「付録」四丁右(左))。
- 107 『大集經』中に同文は見当たらない。ただし、道綽(五六二〜六四五)撰『安樂集』(大正蔵一九五八番)に、『大集經』の説

として類文が見られるため、同書からの孫引きの可能性がある。

「第一扼諸部大乘明説聴方軌者。於中有六。第一大集經云。於説法者作医王想作拔苦想。所説之法作甘露想作醍醐想。其聴法者作增長勝解想作愈病想」(『大正藏經』四七卷四頁下段)

108 龍樹造・鳩摩羅什訳『大智度論』(大正藏一五〇九番)に類文が確認されるが相違する。なお『安衆集』でも、『大集經』に続いて『大智度論』を引いている。

109 『大智度論』中に同文を見出せない。
「聴者端視如渴飲 一心入於語議中 踊躍聞法心悲喜 如是之人心為説」(『大正藏經』二五卷六三頁中段)

110 蓮華化生とは極衆淨土に往生して、蓮華の台の上に生じること。
111 『大般涅槃經』に同文は見当たらないが、次のような類文はある。

「若有善男子善女人。聞大涅槃一字一句。不作字相不作句相不作聞相不作仏相不作説相。如是義者名無相相。以無相相故得阿耨多羅三藐三菩提。善男子。如汝所言聞惡声故到三塗者。是義不然。何以故。非以惡声而至三塗……」(『大正藏經』二二卷五〇五頁上中段)

112 『大般涅槃經』には、左記のごとく類似表現もみられるが、一恒河沙から八恒河沙に分け、その内容にも相違が見られる。

「善男子。若有能於一恒河沙等諸仏世尊發菩提心。然後乃能於惡世中不謗是法。愛樂是典。不能為人分別広説。善男子。若有衆生於二恒河沙等仏所發菩提心。然後乃能於惡世中不謗是法。正解信衆受持読誦亦不能為他人広説。若有衆生於三恒河沙等仏所發菩提心。然後乃能於惡世中不謗是法。受持読誦書寫經卷雖為他説未解深義……」(『大正藏經』一二卷三九八頁下段)

113 「此經」とは仏陀波利訳『仏頂尊勝陀羅尼經』(『大正藏經』一九卷三五一頁上段)のこと。

114 『大般涅槃經』および他經論に同様の文は見当たらない。

115 『提謂波利經』は、前述(六、法崇疏と『提謂波利經』)のとおり蔵外文献であり、完本は現存しない。塚本善隆氏および牧田諦亮氏が『提謂波利經』と認定した本文中には、含まれないようである。

- 116 遠行とは遠くに行くことであり、時に死ぬことを意味する。
- 117 羅綺とは華美な衣服。羅はうすぎぬ、綺はあやぎぬ。綺羅ともいう。
- 118 三鉢衣とは、とても軽い衣服のこと。鉢は重さの単位で、周代における一鉢はわずか○・六グラムとされる。
- 119 八地獄には八熱地獄(等活・黒繩・衆合・叫喚・大叫喚・焦熱・大焦熱・阿鼻)と、八寒地獄(頻伽陀・尼刺伽陀・頻吒・臙臙婆・虎虎婆・嚙鉢羅・鉢特摩・摩訶鉢特摩)とがある。四増とは、八大地獄の四方にある地獄のことで、副地獄ともいう。十六隔とは、八大地獄の周りにある十六種の小地獄をいう(十六小地獄)。すなわち、優鉢地獄、鉢頭地獄、拘牟頭地獄、分陀利地獄、未曾有地獄、永無地獄、愚惑地獄、縮聚地獄、刀山地獄、湯火地獄、火山地獄、灰河地獄、荊棘地獄、沸屎地獄、劍樹地獄、熱鐵丸地獄である。
- 120 三覚には諸説あるが、ここでは自覚・覚他・覚行窮満の三種と解する。阿羅漢は自覚の一覚、菩薩は自覚・覚他の二覚を具し、仏のみ自覚・覚他・覚行窮満の三覚を具足するという。
- 121 罽賓とは西域の国、特に北インドのカシミール(Kashmira)、またはガンダーラ(Gandhara)を指すとされるが、仏典では主に前者と解される。
- 122 『華嚴經』(大正蔵二七八番)の「東北方に菩薩の住処有り、清涼山と名づく。過去の諸菩薩は常に中に於て住す。彼に現に菩薩有り、文殊師利と名づく。一万の菩薩眷属有りて、常に説法を為す」(『大正蔵經』九卷五九〇頁上段)という記載に由来する。
- 123 震旦とは、古代インド人が用いた中国の異称。梵語 Cīnasthāna の音写語。
- 124 儀鳳元年とは六七六年。
- 125 須臾とは muhūrta (牟呼栗多) という時間の単位で、一瞬、瞬時といった短時間を表す。
- 126 煥然とは光り輝く様子、除蕩とは取り除くこと。仏陀波利の帰依礼拝により、五臺山にかかった黒雲・白霧が取り払われ、晴れ渡ったことを示す。

127 冥加とは、気が付かないうちに授かる神仏の加護・助力のこと。

128 素服とは白い服、皓首とは白髪の頭のこと。

129 永淳二歳とは、六八三年のこと。

130 關とは中央をくりぬき、両脇に物見台を具えた宮殿の門。転じて宮闕とは天子の居する宮城全体を指す。

131 委悉とは物事を事細かに詳らかにすること。

132 地婆訶羅(生年不詳(六八七))は梵語 Dhvakaara の音写語で、唐語で「日照」という。地婆訶羅は中インド出身のバラモン僧で、

摩訶菩提寺 (Mahabodhi) や那蘭陀寺 (Nalanda) 等で修学の後、儀鳳年間初(六七六)に中国に来訪。その後、洛陽東京太原寺や西京弘福寺を拠点に、『方广大莊嚴經』『大乘密嚴經』等、一八部三四卷を翻訳した。仏陀波利訳(大正蔵九六七番)

の経序によれば、永淳二年(六八三)頃、地婆訶羅は朝廷の命のもと、典客令の杜行顛等とともに仏陀波利請来の梵本を漢訳したと記される。一方、地婆訶羅訳(大正蔵九六九番)に付された沙門彦悰の経序は、全く異なる翻訳状況を伝えている。すなわち、すでに儀鳳四年(六七九)に杜行顛による漢訳がなされ、それを改訂する形で、地婆訶羅が永淳元年(六八二)に再訳したという。『大正蔵経』には、地婆訶羅訳として、『仏頂最勝陀羅尼經』(大正蔵九六九番)、『最勝仏頂陀羅尼淨除

業障呪經』(大正蔵九七〇番)の二種が収録される。

133 杜行顛は中国京兆(現在の長安周辺)の出身で、朝散郎行鴻臚寺典客令(鴻臚寺にて朝廷に参内する諸候や異民族を接待)の役を務めた。詩文の才があり、梵語にも精通したとされる。沙門彦悰の経序によれば、杜行顛は儀鳳四年(六七九)に本経を訳出したという。『大正蔵経』には、杜行顛訳本として、『仏頂尊勝陀羅尼經』(大正蔵九六八番)が収録される。杜行顛訳は、避諱の慣習により、朝廷の諱を避けたため、「世尊」を「聖尊」、「世界」を「生界」と訳する等、特殊な漢訳がなされている。

134 九重とは、皇帝が住まう宮殿・宮廷。中国では、宮殿の門を九重に造ったことに由来する。

135 紫微とは、北極星を中心とした星群であり、天帝の住む場所とされた。転じて、天子・皇帝が宮殿・宮廷を指す。

- 136 大正蔵本には「未伝」とあるが、高基本および旧統蔵本では「未訳」である。本論本文では、後句「已訳」と対応させ、「未訳」を採用した。
- 137 恒心とは常に保持して変わらない正しい心。ぐらつかない心。
- 138 順貞とは、仏陀波利訳（大正蔵九六七番）の経序によれば、西明寺に住した中国僧で、梵語をよく理解したことから、共訳者として仏陀波利の手助けをしたと記される。
- 139 測法師とは、唐代法相宗の僧・円測（六一三～六九六）と推定される。仏陀波利訳（大正蔵九六七番）の経序では、円測への言及は見られないが、七三〇年編纂の『続古今訳経図紀』では、「……遂対翻經大徳円測共貞翻出」（『大正蔵経』五五巻八六五頁中段）と記し、仏陀波利・順貞による共訳の際、円測も関与したと伝えている。おそらく、法宗は『続古今訳経図紀』を下敷きに、本文を記したと推定される。
- 140 罽賓三蔵とは、罽賓 (Kashmir) 出身の僧である仏陀波利を指す。
- 141 亮汰注のみ「同じく」を加えて、「同じく是れ永淳二年の翻なり」とする。
- 142 仏陀波利訳（大正蔵九六七番）の経序によれば、仏陀波利は本経を漢訳した後、梵本をもって五臺山に入り、消息を断つたとされる。九八八年編纂の『宋高僧伝』、一一世紀頃の『広清涼伝』等の後代の資料では、五臺山の「金剛窟」に入ったと特定されている。『古清涼伝』『広清涼伝』等によれば、金剛窟とは文殊菩薩が二万菩薩の眷属衆と住する処とも、また文殊菩薩が過去仏由来の聖遺物を納めた場所ともされ、北臺寄りに存したと推定される。五臺山への入住は、老人の聖囑のもと、本経の梵本をもたらした仏陀波利が、念願叶って文殊菩薩に邂逅できたことを暗示している。
- 143 鳩摩羅什 (Kumārājīva : 三四四～四一三) の古訳について言及しているが、各種の経録・史料に記載がなく、現存も確認されない。仏頂尊勝陀羅尼の流行年代は七世紀後半であり、鳩摩羅什の翻訳は想定しがたいが、この古訳が何を意味しているのか興味深い。
- 〈キーワード〉法宗、『仏頂尊勝陀羅尼經教述義記』、不空、唐代密教、『提謂波利経』

法崇述『仏頂尊勝陀羅尼經教迹義記』シノプシス表

『仏頂尊勝陀羅尼經教迹義記』の導入

『仏頂尊勝陀羅尼經』の因縁

『仏頂尊勝陀羅尼』題号の大意

『仏頂尊勝陀羅尼經』の概要：十門分別

第一釋其教主 第二以處表事 第三顯教被機 第四見身同異 第五出經宗體

第六聽法軌儀 第七見聞得利 第八釋經題目 第九翻譯時節 第十依文判釋

『仏頂尊勝陀羅尼經教迹義記』の本文解釈

1 教起 因縁分	1 證信序	1 信成就		如是
		2 聞成就		我聞
		3 時成就		一時
		4 主成就		薄伽梵
		5 處成就		在室羅筏住誓多林給孤獨園
		6 衆成就		與大苾芻衆千二百五十人俱
	2 發起序	1 善住請	1 標處顯名	爾時三十三天於善法堂會有一天子名曰善住
			2 大天遊戲	與諸大天遊於園觀又與大天受勝尊貴與諸天女前後圍繞歡喜遊戲
			3 受諸快樂	種種音樂共相娛樂受諸快樂
			4 空聲告期	爾時善住天子即於夜分聞有聲音善住天子却後七日命將欲盡
			5 示所生界	命終之後生贍部洲
			6 正顯受身	受七返畜生身即受地獄苦從地獄出希得人身生於貧賤處於母胎即無兩目
			7 善住驚怖	爾時善住天子聞此聲已即大驚怖身毛皆豎愁憂不樂
			8 疾往帝釋	速疾往詣天帝釋所悲啼號哭惶怖無計頂禮帝釋二足尊已
			9 重述前言	白帝釋言聽我所說我與諸天女共相圍繞受諸快樂聞有聲音善住天子却後七日命將欲盡命終之後生贍部洲七返受畜生身受七身已即墮諸地獄從地獄出希得人身生貧賤家而無兩目
			10 希垂救濟	云何令我得免斯苦
		2 帝釋請	1 聞之驚愕	爾時帝釋聞善住天子語已甚大驚愕
			2 思受何身	即自思惟此善住天子受何七返惡道之身
			3 入定諦觀	爾時帝釋須臾靜住入定諦觀
			4 具知所受	即見善住天子當受七返惡道之身所謂猪狗野干獼猴蟒蛇鳥鷲等身食諸穢惡不淨之物
	5 痛傷心腑	爾時帝釋觀見善住天子當墮七返惡道之身拯助苦惱痛割於心諦思無計		
	6 師仰如來	何所歸依唯有如來應正等覺令其善住得免斯苦		
	7 帝釋持供	爾時帝釋即於此日初夜分時以種種華鬘塗香末香以妙天衣莊嚴執持		

2 聖教所説分	1 現相表奇		8 詣聖恭敬	往詣誓多林園於世尊所到已頂禮佛足右邊七匝	
			9 廣獻佛前	即於佛前廣大供養	
			10 具聞七返	佛前胡跪而白佛言世尊善住天子云何當受七返畜生惡道之身具如上説	
	2 標名示徳	1 舉名顯徳			爾時如來頂上放種種光遍滿十方一切世界已其光還來遶佛三匝從佛口入佛便微笑
					告帝釋言天帝有陀羅尼名爲如來佛頂尊勝能淨一切惡道
					能淨除一切生死苦惱
					能淨除諸地獄閻羅王界畜生之苦又破一切地獄能迴向善道
					佛告天帝此佛頂尊勝陀羅尼若有人聞一經於耳先世所造一切地獄惡業皆悉消滅
					當得清淨之身隨所生處憶持不忘從一佛刹至一佛刹從一天界至一天界遍歷三十三天
					所生之處憶持不忘天帝若人命欲將終須與憶念此陀羅尼還得增壽
					得身口意淨身無苦痛隨其福利隨處安穩
					一切如來之所觀視
					一切天神恒常侍衛
					爲人所敬
3 釋天重請	14 遊入勝境			惡障消除	
				一切菩薩同心覆護	
				佛告天帝若人能須臾讀誦此陀羅尼者此人所有一切地獄畜生閻羅王界餓鬼之苦破壞消滅無有遺餘	
				諸佛刹土及諸天宮一切菩薩所住之門無有障礙隨意遊入	
爾時帝釋白佛言世尊唯願如來爲衆生説增益壽命之法					
仏頂尊勝陀羅尼の讃嘆と十門科判					
4 佛答深詞	1 歸敬尊徳門			爾時世尊知帝釋意之所念樂聞佛説是陀羅尼法即説咒曰 曩謨娑～婆識縛帝	
				恒爾也他 唵	
				尾戍駄野」～「娑嚩娑嚩尾秣弟	
				阿鼻訖左 𑖀」～「阿慾散駄囉 呪	
				戍駄野戍駄野識曩尾秣弟」～「薩嚩嚩囉拏尾秣弟	
				鉢囉底頼鞞多野阿欲秣弟」～「麼拏麼拏	
				恒闍多部多句致跛哩秣弟」～「娑麼囉娑麼囉	
				薩嚩沒駄地瑟耽多躡弟」～「麼麼	
				薩嚩薩恒嚩難左迦野尾秣弟」～「摩訶母捺囉	
				娑嚩賀」(尊勝小真言・心中心真言を含む)	
5 重顯神功	1 顯名示徳			爾時佛告帝釋此咒名淨除一切惡道佛頂尊勝陀羅尼能除一切罪業等障能破一切穢惡道苦	
				天帝此陀羅尼八十八號伽沙俱低百千諸佛同共宣説隨喜受持	

	3 如來智印		如來大智印印之為破一切眾生穢惡道義故
	4 能破三途		此彰決定之德為破一切地獄畜生閻羅王界眾生得解脫故
	5 救生死難		臨急苦難墮生死海中眾生得解脫故
	6 轉報受樂		短命薄福無救護眾生
	7 滅惡業苦		樂造雜染惡業眾生故說
	8 標功總結		又此陀羅尼於瞻部洲任持力故能令地獄惡道眾生種種流轉生死薄福眾生不信善惡業失正道眾生等得解脫義故
6 專令授與	1 付囑傳授		佛告天帝我說此陀羅尼付囑於汝汝當授與善住天子
	2 重誡令持		復當受持讀誦思惟愛樂憶念供養
	3 廣傳瞻部		於瞻部洲一切眾生廣為宣說此陀羅尼
	4 宣示諸天		亦為一切諸天子故說此陀羅尼印付囑於汝
	5 殷勤付囑		天帝汝當善持守護勿令忘失
7 廣陳多福	1 聞咒滅罪		佛告天帝若人須臾得聞此陀羅尼千劫已來積造惡業重障
	2 不墮三途 (能破三途)		應受種種流轉生死地獄餓鬼畜生閻羅王界
	3 捨鬼神身		阿修羅身夜叉羅刹鬼神布單那羯吒布單那阿婆娑摩羅
	4 轉畜生身		蚊虻龜狗蟒蛇一切諸鳥及諸猛獸一切蠢動含靈乃至蟻子之身更不重受
	5 得生勝處		即得轉生諸佛如來一生補處菩薩同會處生或得大姓婆羅門家生或得大姓利種家生或得豪貴最勝家生
	6 倍勝前生		天帝此人身得如上貴處生者皆由聞此陀羅尼故轉所生處皆得清淨
	7 舉後證果		天帝乃至得到菩提道場之處皆由讚美此陀羅尼功德如是
	8 重顯勝名		天帝此陀羅尼名為吉祥能淨一切惡道
	9 摩尼讚德		此佛頂尊勝陀羅尼猶如日藏摩尼之寶淨無瑕穢淨等虛空光焰照徹無不周遍若諸眾生持此陀羅尼亦復如是
	10 淨金為論		亦如閻浮檀金明淨柔軟令人喜見不為穢惡之所染著天帝若有眾生持此陀羅尼亦復如是乘斯善淨得生善道
	11 廣顯流通		天帝此陀羅尼所在之處若能書寫流通受持讀誦聽聞供養能如是者一切惡覺皆得清淨
	12 能破惡趣		一切地獄諸苦悉皆消滅
	13 安置處所		佛告天帝若人能書寫此陀羅尼安高幢上或安高山或安樓上乃至安置窰塔波中
	14 顯能敬人		天帝若有苾芻苾芻尼優婆塞優婆夷族姓男族姓女

	15 塵影沾身	於幢等上或見或與幢相近其影映身或風吹陀羅尼上幢等上塵落在身上
	16 廣除多苦	天帝彼諸衆生所有罪業應墮惡道地獄畜生閻羅王界餓鬼阿修羅身惡道之苦皆悉消滅不爲罪垢之所染汚
	17 總結授記	天帝此等衆生爲一切諸佛之所授記皆得不退轉於阿耨多羅三藐三菩提
8 建塔尊人	1 持供造塔	天帝何況更以多諸供具華鬘塗香末香寶幢幡蓋衣服瓔珞作諸莊嚴於四衢道造窣都波
	2 安置神咒	安置陀羅尼
	3 呈恭修供	合掌恭敬旋遶行道歸依禮拜
	4 標人顯德	天帝彼人能如是供養者名摩訶薩埵
	5 佛子住持	真是佛子持法棟梁
	6 全身寶塔	又是如來全身舍利窣堵波塔
9 靜息護持	1 靜息嚴供	爾時閻羅法王於時夜分來詣佛所到已以種種天衣妙華塗香末香莊嚴供養佛已
	2 修敬歸依	遶佛七匝頂禮佛足
	3 述詞稱讚	而作是言我聞如來演說讚持大力陀羅尼
	4 隨逐守護	我常隨逐守護不令持者墮於地獄
	5 歎人護念	以彼隨順如來言教而護念之
10 天王更請	1 天王修敬	爾時護世四天王遶佛三匝
	2 請宣持法	白佛言世尊唯願如來爲我廣說持陀羅尼法
11 如來正答	1 如來許說	爾時佛告四天王汝今諦聽我當爲汝宣說受持此陀羅尼法
	2 顯短命位	亦爲短命諸衆生說
	3 潔淨剋時	當先洗浴著新淨衣白月圓滿十五日時
	4 明誦神咒	持齊誦此陀羅尼滿其千遍
	5 增壽除病	令短命衆生還得增壽永離病苦
	6 滅障壞苦	一切業障悉皆消滅
12 略顯威嚴	1 捨畜生身	一切地獄諸苦亦得解脫諸飛鳥畜生含靈之類聞此陀羅尼一經於耳盡此一身更不復受
	2 現病得除	佛言告天帝若遇大惡病聞此陀羅尼即得永離
	3 當病消滅	一切諸病亦得消滅
	4 不墮惡道	應墮惡道亦得除斷
	5 得生淨土	即得往生寂靜世界
	6 不受胞胎	從此身已後更不受胞胎之身
	7 蓮華化生	所生之處蓮華化生
	8 常識宿命	一切生處憶持不忘常識宿命
	9 咒土遺骸	佛言若人先造一切極重罪業遂即命終乘斯惡業墮地獄或墮畜生閻羅王界或墮餓鬼乃至墮大阿鼻地獄或生水中或生禽獸異類之身取其亡者隨身分骨以上一把誦此陀羅尼二十一遍散亡者骨上即得生天
	10 誦持消供	佛言若人能日日誦此陀羅尼二十一遍應消一切世間廣大供養
	11 得生極樂	捨身往生極樂世界
	12 證大涅槃	若常誦念得大涅槃

		13 延命受樂		復增壽命受勝快樂
		14 生十方國		捨此身已即得往生種種微妙諸佛刹土
		15 奉觀如來		常與諸佛俱會一處
		16 得餐妙義		一切如來恒爲演說微妙之義
		17 蒙尊受記		一切世尊即授其記身光照曜一切佛刹土
	13 示軌令持	1 示軌立壇		佛言若誦此陀羅尼法於其佛前先取淨土作壇隨其大小方四角作以種種草華散於壇上燒衆名香
		2 一心念佛		右膝著地胡跪合掌一心念佛
		3 作母陀羅尼		作慕陀羅尼印屈其頭指以大母指壓合掌當其心上
		4 明誦神咒		誦此陀羅尼一百八遍訖
		5 壇中雨華		於其壇中如雲雨華
		6 能供多佛		能遍供養八十八俱胝毘迦沙那庾多百千諸佛
		7 如來讚歎		彼佛世尊咸共讚言善哉希有真是佛子
		8 得證三昧		即得無障礙智三昧得大菩提心莊嚴三昧
		9 總結其儀		持此陀羅尼法應如是
	14 標功授與	1 總結功能		佛告天帝我以此方便一切衆生應墮地獄道令得解脫
		2 惡趣清淨		一切惡道亦得清淨者
		3 現增壽命		復令持者增益壽命者
		4 付囑天帝		天帝汝去將我陀羅尼
		5 授與善住		授與善住天子滿其七日汝與善住俱來見我
3 依教奉行分	1 天帝釋還宮			爾時天帝於世尊所受此陀羅尼法奉持還於本天
	2 授與善住			授與善住天子爾時善住天子授此陀羅尼已
	3 受持願滿			滿六日六夜依法受持一切願滿
	4 解脫衆苦			應受一切惡道等苦即得解脫
	5 住道增壽			住菩提道增壽無量
	6 讚其神力			甚大歡喜高聲歎言希有如來希有妙法希有明驗甚爲難得令我解脫
	7 持供報德			爾時帝釋至第七日與善住天子將諸天衆嚴持華鬘塗香末香寶幢幡蓋天衣瓔珞微妙莊嚴往詣佛所設大供養以妙天衣及諸瓔珞供養世尊遶百千匝
	8 歡喜聽法			於佛前立踊躍歡喜坐而聽法
	9 如來授記			爾時世尊舒金色臂摩善住天子頂而爲說法授菩提記
	10 正顯經名			佛言此經名淨一切惡道佛頂尊勝陀羅尼汝當受持
	11 大衆流通			爾時大衆聞佛所說皆大歡喜信奉奉行